

支援センター名	とくしま体験活動ボランティア活動支援センター	
所在地	〒770-0943 徳島県徳島市中昭和町 1-2 (徳島県立総合福祉センター内 2階)	
連絡先	Tel 088-625-3362	Fax 088-625-3376

事業の概要とポイント

やまびこコンサートは、障害を持つ人たちから募集した詩に曲を付けて発表したり、朗読で表現したりすることで、障害者が日頃考えていることや願い、悩みなどを多くの人たちに知ってもらう目的で開催されているボランティア啓発活動である。障害を持つ人も持たない人もボランティア実行委員としてそれぞれの役割を担当している。

今回このコンサートの司会を、若い世代に担当してもらうことが決まり、高校の放送部に相談したところ協力をしてもらうことができた。

関係した学校・団体の名称

徳島県立小松島高等学校

放送部員 2名

地域の現況・特色

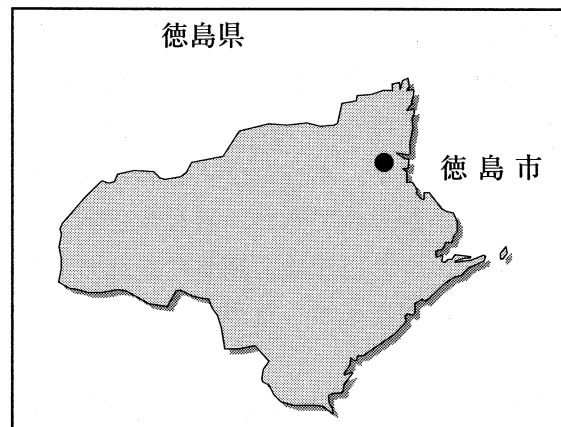
活動対象地域の人口は平成 15 年 1 月末日現在 43,676 人である。

小松島市は、昭和 26 年 4 月那賀郡立江町と合併、同年 6 月市制を施行、ここに港都小松島市が誕生した。その後、坂野町が昭和 31 年に合併し、現在の小松島市になった。市の面積は 44.77 平方キロメートルである。

歴史をひもとくと貝塚の発掘、銅鐸の出土、古墳郡の発見などによって、新石器時代から古代にかけて高度な文化生活者が多く居住していたと思われる。

慶長以後、蜂須賀公が入国して太平が続き金磯新田が開拓され、紺屋と藍商人が活躍し、藩の銀札引き受け方を命ぜられなど、阿波の商業、金融の中心地として栄えた。

本市の地名は、平安時代、篠原郷、(前原、江田付近) 新居郷(新居見付近) 余戸郷(田野芝生付近)があり、このうち篠原郷は一時、京都の仁和寺の荘園であり、この仁和寺は京都の『小松郷』というところにあつたため、この名にちなんで『小松島』の地名が生まれた。



企画から活動までの経緯

- 5月7日 やまびこコンサート実行委員会で司会を高校の放送部員に依頼する案が出された。
- 5月14日 実行委員会から相談を受け、放送部のある高校を調べた。
- 5月21日 高校放送部の県下の取りまとめ先から前年度最優秀校の小松島高校を教えてもらい連絡をした。
- 5月27日 やまびこコンサートの内容についてビデオテープ、パンフレットなどの資料を高校へ送ることになった。
- 6月18日 実行委員に小松島高校に詳しい内容の説明にってもらい、連絡調整をした。
- 7月24日 四国放送のアナウンサーの協力を得て、司会を担当する高校生に四国放送の見学をしてもらい司会の注意事項についてアドバイスをもらった。
- 9月10日 コンサートのポスター、チラシなどができたので、実行委員会から預かったものを小松島高校に届けた。
- 10月6日 出演者、スタッフの全体打ち合わせ会があり、司会者も参加した。コンサート全体の流れについて細かいことが話し合われた。
- 11月3日 コンサート会場で前日のリハーサルが行われ、司会者が進行を実際に担当した。
- 11月4日 コンサート本番において、落ち着いて、さわやかな司会進行をした。当日は約600人の観客があり100人のスタッフとともにコンサートを無事に終了することができた。

事例の展開内容（特色など）

やまびこコンサートが20周年を迎えるにあたって、若々しい司会者として今までのなかで最も若い高校生に司会を担当してもらおうという案が出され、相談があった。誰でもができるボランティアではなかったので放送部員に限った。しかし、最初はどこの高校に依頼すればいいのか悩んだが、ボランティアの事業で日頃付き合いのある放送局に問い合わせをすることで、取っかかりができた。高校生ということで、学校、顧問、本人、家族の了承が必要になり、最初のうちは連絡・調整にかなりの時間が必要であった。放送部で学んだ「アナウンス」という特技を活かしたボランティアができたと本人たちは喜んでいて。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

今までになかったような初めての企画であったので、どのように取り組んでいいのかわからなかった。また、高校の放送部には直接接点がなかったのでどこに連絡したらいいのかもわからなかった。今まで取り組んできたさまざまな活動やコーディネイトのなかにマスコミ各社の人たちと交流があり、そこからきっかけをつかむことができた。ボランティアの事業を企画・実施する中でできた人のつながりがこんな時に役に立つということがわかった。高校生が参加する実行委員会が夜のため、打ち合わせをスムーズに進めるためにいろいろと工夫

をした。

評 価

今回の企画では最初から放送部である高校に依頼したので、基本的な訓練が十分できていたと考えられる。生徒たちの特技を活かしたボランティア活動をコーディネートできたことはよかった。放送関係者、学校、顧問の先生、送り迎えをしてくれた家族などの協力あってこの企画は成功した。多くの人々の協力があって実現するものであると同時に、きめの細かい情報提供が大切であることも実感した。

【活動風景】

